

氏 名(本 籍)	ノザキ イズミ (ブラジル)		
学 位 の 種 類	博 士 (教 育 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,053 号		
学位授与年月日	平成 5 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	教 育 学 研 究 科		
学位論文題目	日本の子どもの言語コードに関する実証的研究 —子どもの言語コード特性と日本語使用および母親の言語態度との関連分析—		
主 査	筑波大学教授	湊	吉 正
副 査	筑波大学教授	教育学博士	山 本 恒 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士	福 沢 周 亮
副 査	筑波大学教授	中 野 善 達	

## 論 文 の 要 旨

本論文は、序章、本 4 章、結章からなり、本文228頁(1頁当たり1,170字)、参考文献 9 頁、補足資料42頁、総計279頁によって構成されている。

児童・生徒の「中途退学」「進級不能」を引き起こす要因として、社会・経済的要因と並んで、近年、特に注目されてきたのが、子どもの言語能力とその発達を阻害する要因である。本論文は、こうした要因を視野にいれて構築されたバーンスタイン (B.Bernstein) のコード理論をもとに、日本における子どもの言語コード形成の問題を、それに影響を及ぼしていると思われる母親の言語的態度とかかわらせて分析、「中途退学」や「進級不能」問題に悩むブラジルの教育——とりわけそれらの問題を解決するための言語訓練のあり方について考える手掛かりを得ようとしたものである。

まず序章では、日本における子どもの言語コードとその形成に着目するに至った経過・背景を述べるとともに、本研究における課題が、(1)小学校入学直後の子どもの言語コード、(2)その母親の子どもに対する態度と言語コード、(3)母親の態度と子どもの言語コード形成との関係を、実証的に明らかにすることにあることを示している。

次に第 1 章では、言語学、社会学、心理学における言語的社会化研究の歴史的発展過程を概観した上で、本研究の中心を占めるバーンスタインの「コード理論」、ハリディー (M.A.K. Halliday) の「言語の社会的機能論」、ヴィゴツキー (L.S. Vygotsky) の「精神発達理論」の各理論を個別に検討、「コード理論」にあつては、それが子どもの言語使用能力を捉え、その形成を考察する場合の基礎となる点で、「言語の社会的機能論」にあつては、それが調査において子どもと母親の言語使用を引き出す際の枠組みとなる点で、「精神発達理論」にあつては、それが言語使用能力の発達可能性

を支持している点で、3者ともに本研究のベースとなることを明らかにしている。

第2章では、データ収集および分析の方法について理論的な検討を行うとともに、具体的な調査方法および分析方法の工夫・考案を行っている。すなわち、子どもの言語コードを調べるための調査および母親の統制・教授態度、言語コードを調べるための調査を、ハリディーとバーンスタインの理論を踏まえながら課題設定形式の面接調査として創案、その具体的な方法の提示を行っている。またデータ分析の方法については、面接調査における会話の記録を文章構造の種類に着目して定性的に分析する方法を創案、その分析枠組を提示している。そしてさらに、子どもの家族のタイプが「地位志向的」であるか、「個人志向的」であるかをみるための質問紙調査の設計を、家族内の社会化の様式、役割体系、コミュニケーション体系をみる形で行っている。

続く第3章、第4章では、以上の調査を実施した結果の検討を行っている（調査対象：つくば市内と稲敷郡美浦村内の小学校各1校の1年生計29名とその母親）。すなわち第3章では、子どもに対する調査と母親に対する調査のデータをそれぞれ別個に、第4章ではそれらを相互に関連づけながら分析している。そしてこれら分析を通じて、以下の事実の指摘を行っている。

(1)子どもに対して行った面接調査によって、「限定コードを身につけた子ども」と「精密コードを身につけた子ども」とを区別し、両者を比較・検討した結果、両者の間には質的な差異が認められた。

(2)母親に対する質問紙調査をもとに子どもの家族を「地位志向家族」と「個人志向家族」に分類、子どもの言語コードとの関連を分析したところ、「地位志向家族」の子どもの多くは限定コードを身につけており、「個人志向家族」の子どもはほとんどが精密コードを身につけていた。

(3)母親に対する面接調査の結果を分析したところ、(a)精密コードを身につけている子どもの母親は、精密コードをもっているにもかかわらず、必要に応じて限定コードに変更し、それを使用していること、(b)それに対し、限定コードを身につけた母親は、普段は子どもに限定コードを使って話しているものの、精密コードを使用する必要がある場合には、精密コードも使用できることが明らかであった。このことから、(c)精密コードを身につけている子どもの母親と限定コードを身につけている子どもの母親は、どちらも言語能力が高いとみなせること。つまり(d)両者の違いは、「言語能力」の違いではなく、「言語使用能力」の違いであると言いうること。

(4) 以上の結果から、子どもの言語コード形成には、母親の言語的態度という社会的要因が大きく影響しているとみなせること。その点で、子どもの精密コードの形成には、母親の模範的態度が欠かせないものであると言いうること。

結章では、論文全体をまとめるとともに、本研究の成果と今後の課題を述べている。すなわち、本研究の結果が、「限定コードしか身につけていない子ども」のための言語訓練プログラムの必要性和可能性を示唆するものであること、本研究の結果からみて、そうしたプログラムにおいては、社会的人間関係による言語使用の発達をねらいとすべきであること、以上の点を述べた上で、今後、ブラジルにおいてそうしたプログラム開発をする場合の課題を提示、論文を締めくくっている。

## 審 査 の 要 旨

本研究は、子どもの学習能力の促進を基礎づけるその言語能力の生成の問題を、教育社会学上の課題として設定し、丹念な調査・分析を通して、新見を提示したものである。

すなわち、本研究において、日本の子ども並びにその母親を対象として、申請者が、ハリディーの理論等を参照しつつ創案したいくつかの面接調査・質問紙調査を実施し、その調査データについてバーンスタインのコード理論の枠組にもとづいて綿密な分析を加え、〔論文要旨〕の第3章・第4章(1)～(4)で記したような、いくつかの注目すべき新見を提示し得た点は、高く評価される。

本研究の特徴点として、①日本の子どものみならずその母親をもかかわらせて調査・分析を進めていること、②調査データに対して、質的記述を中核とした定性分析を施していること、③日本の子ども・母親を対象とする場合に、バーンスタインのコード理論が有効か否かを検証する意味をもっていること、④直接的な調査対象とされている日本のみならず、ブラジルさらにはイギリスの教育状況にも関連した比較的視野を内包した研究であること等をあげることができる。

しかしながら同時に、本研究には、次のような問題点も指摘され得る。①質的記述による定性分析とともに定量分析をかなりの程度導入しているが、その統計的处理に不十分な箇所が多々見いだされること、②全体的に、「言語能力」と「言語使用能力」のそれぞれの規定とそれらの関係の把握に明快でないところがあること、③日本の子どもをめぐって、さらに家族的背景、社会的背景に関する社会学的知見を盛り込んで考察を進めていく必要が認められること等。

しかし、本研究は、日本の小学校1年生とその母親とを対象とし、周到な立案とバーンスタインのコード理論にもとづく綿密な分析によってまとめあげられた斬新な内容のものであり、我が国の教育学研究の進展とブラジルの言語訓練プログラム開発に寄与すべき研究であると認められる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。